

## 原著

## 「つるばら村」シリーズにおけるお店やさんの意味するもの

佐々木 由美子<sup>1)</sup>A Study of the Role of Stores in the *Vine Rose Village* Series

Yumiko Sasaki

## 要約

『つるばら村のパン屋さん』（講談社、1998）を第一冊とする「つるばら村」シリーズは、茂市久美子の人気シリーズである。つるばら村の豊かな自然の中で繰り広げられる物語は、幻想的で優しくあたたかく、現実と非現実とが渾然一体となった独自のファンタジー世界が構築されている。「つるばら村」シリーズをはじめ、茂市の児童書作品においては、お店やさんが中心となって展開しているものが6割以上に上る。本論では、つるばら村に登場するお店やさんや、そこで扱われるモノを中心に、お店やさんが果たす役割や、つるばら村というファンタジー世界のあり方、作品世界のあたたかさ、やさしさ、癒しがどこから生まれてきているのかについて考察した。

キーワード：自然、贈与、閉鎖性と開放性

## 1. 問題の所在

『つるばら村のパン屋さん』（講談社、1998）を第一冊とする「つるばら村」シリーズは、茂市久美子の人気シリーズである。つるばら村の豊かな自然の中で繰り広げられる物語は、幻想的で優しくあたたかく、現実と非現実とが渾然一体となった独自のファンタジー世界が構築されている。

読者の感想からも「ほっこりやさしい気持ちが満たさせるような、そんな温かさが満ち溢れた本です」「教材の一部に抜粋されていました。気になったので借りて、三年生の息子と夢中で読みました」「不思議な内容のお話で、とても心が癒されます」<sup>1)</sup>といった声が聞かれ、子どもだけでなく、その独自の世界

に夢中になる大人読者も多い作品である。

しかし、その一方で、茂市の作品は国語の教材研究や授業実践例として取り上げられることはあるものの<sup>2)</sup>、作品世界そのものを詳細に分析した研究は管見ではみあたらない。茂市のファンタジー世界がどのように成り立っているのか、その独自性とは何なのかについて明らかにしたいと考えたのが発端である。茂市の作品世界を読み解く一つの鍵となるのが、お店やさんではないかと思われる。以下に「つるばら村」シリーズ10冊のタイトルをあげる。

1) 佐々木由美子 東京未来大学こども心理学部 (Tokyo Future University)

表1 「つるばら村」シリーズ作品一覧

| タイトル          | 出版年  | 絵     |
|---------------|------|-------|
| つるばら村のパン屋さん   | 1998 | 中村悦子  |
| つるばら村の三日月屋さん  | 2001 | 中村悦子  |
| つるばら村のくるみさん   | 2003 | 中村悦子  |
| つるばら村の家具屋さん   | 2004 | 柿田ゆかり |
| つるばら村のはちみつ屋さん | 2005 | 柿田ゆかり |
| つるばら村の理容師さん   | 2007 | 柿田ゆかり |
| つるばら村の洋服屋さん   | 2008 | 柿田ゆかり |
| つるばら村の大工さん    | 2009 | 柿田ゆかり |
| つるばら村のレストラン   | 2010 | 柿田ゆかり |
| つるばら村の魔法のパン   | 2012 | 中村悦子  |

タイトルからもうかがわれるように、「三日月屋」のパン屋のくるみさんを中心におきながらも、そこでは家具屋さん、はちみつ屋さん、理容師さん、洋服屋さんと、さまざまな「お店やさん」が登場している。

しかし、お店やさんが登場するのは、「つるばら村」シリーズだけではない。茂市の著作は、『ようこそタンポポしよくどうへ』（あかね書房、1989）や、『おちばおちばとんでいけ』（国土社、1991）、『ドラゴンにごようじん』（国土社、2001）、『おひさまのおへんじシール』（講談社、2012）などの幼年童話をはじめ、小学校3年生の国語教科書に掲載された『ゆうすげ村の小さな旅館』（講談社、2000）や、『またたびトラベル』（学研、2005）など小学校中学年を主な対象読者とした作品のほか、紙芝居や紀行文、ノンフィクションなど、90作品を超える。茂市の子ども向け作品を概観すると、食堂、写真館、旅館、雑貨屋、鋳掛屋、花屋、洗濯屋等、やはり数多くの店舗が登場しているのである。シリーズ作品が多いこともあるが、児童書の6割以上がお店やさんが中心となって、物語が展開していることがわかる。（巻末表参照）

これだけ多くのお店やさんが、さまざまな作品に登場するのは、やはりお店やさんだからこそ描ける何かがあるからではないだろうか。そして、こうしたお店やさんが登場する作品の方が、ドラゴンや魔女が活躍する「ドラゴン」シリーズや「魔女バジル」シリーズよりも、より茂市らしさや独自のファンタジー世界を感じるのなぜなのだろうか。

本論では、つるばら村に登場するお店やさんや、そこで扱われるモノを中心に、お店やさんが果たす役割や、つるばら村というファンタジー世界のあり方、作品世界のあたたかさ、やさしさ、癒しがどこから生まれてきているのかについて考察していきたい。

分析テキストは、先述した「つるばら村」シリーズ10作品とする。なお、以降、『つるばら村のパン屋さん』は『パン屋さん』、『つるばら村の家具屋さん』は『家具屋さん』と、作品名を略記することとする。

## 2. つるばら村というトポス

ここではまず、物語の中心舞台となっている、つるばら村についてみていく。

### (1) 作品と作家の文学風土

「つるばら村は、わたしのふるさとである、かつての新里村とその周辺の村が舞台となっています」<sup>3</sup>と茂市自身が述べているように、「つるばら村」シリーズは、作者を育んだ風土と作品世界が密接につながっている。

茂市久美子は、1951年、岩手県新里村茂市（現在は、宮古市茂市）で誕生した。実践女子大学英文科在学中から、仏文学者・小説家・児童文学者である那須辰造に師事。卒業後、会社勤務を経て、ネパールやヨーロッパの山岳地方を訪問し、『氷河と青いケシの国 ネパール紀行』（あかね書房、1981）、『ヒマラヤの民話を訪ねて』（白水社、1982）など、紀行文や民話の採集も手がけている。その後、執筆活動に入り、1989年に最初の童話作品『ようこそタンポポしよくどうへ』（あかね書房）を出版している。『おちばおちばとんでいけ』（国土社、1991）で、第3回のひろすけ童話賞<sup>4</sup>を受賞したのは41歳の時だった。

ひろすけ童話賞の選考において、茂市の作品は「尾を見せない狐家族の演劇が、山間いの美しい自然の息づきに融けこんでメルヘンの味わいを深くしている」（西沢正太郎）、「詩情溢れる夢幻的な童話で文章にも個性的な味がある」（久保喬）等と評された<sup>5</sup>。選考評からもうかがえるように、「つるばら村」シリー

ズだけでなく、茂市の作品は自然の豊かさや美しさと深く関わりながら、物語が展開していくものが多い。茂市は自身の創作について、次のように述べている。

私が生まれたのは北上山地の、山のふもとに集落があるというような場所で、豊かな自然のなかで育ちました。今はもうありませんが、私が生まれた頃は茂市村があって、私は「茂市村の茂市さん」なんです。（中略）その頃、当たり前のように聞いていた川のせせらぎの音や、吹く風の薫り、畑の作物が成長していくさまなど、日常的な自然とのふれあいや、農家のおじいさん、おばあさんたちとの関わりなどが、今の自分の創作に反映されているなあと思う。私は、時計でもパンの生地でも、すべてのものには、命が宿っていると思っているのですが、そういう思想も、この自然豊かな地で育ったことが、原点になっているように感じます。<sup>6</sup>

作者を育んだ自然豊かな風土が、物語を生み出す基盤にあり、作品に色濃く反映されているのだというのである。茂市は「自然には、説明のつかない、私たちが知らない秘密がたくさんあるのかなという気持ちになります」<sup>7</sup>と述べているが、茂市の幻想的なファンタジー世界は、その自然のもつ「秘密」、すなわち神秘さや奥深さを作品として具体化しているように思われる。

## (2) 詩的イメージをかきたてる場所

自然の神秘さや奥深さは、その地名においても表現されている。つるばら村は、「つるばら村」という名前からして、非常に詩的で神秘や魔法に満ちた閉鎖的な空間をイメージさせる。つるばら村は次のように描写されている。

つるばら村は、ウメもサクラもツルバラも一度に咲いて、村じゅうがピンクのもやにおおわれ

たみたいでした。（『三日月屋さん』 p.144）

村じゅうで、白やピンクのツルバラの花がさきはじめました。（『魔法のパン』 p.134）

つるばら村をとりまく山々では、目ざめたばかりの若葉が、日に日に緑の色をこくしていました。（『家具屋さん』 p. 6）

上記に示したように、つるばら村は山々に囲まれ、春には梅や桜や蔓薔薇がいつぱんに花開き、村中がピンクのもやにおおわれる美しい村として描かれている。また、こうした詩的イメージをかきたてているのは、村の名前だけではない。月見が原、笛吹山、白森山、野いばらが原、よもぎ平、つめくさ平、たんぼぼ平など、つるばら村に登場するあらゆる地名が、〈自然〉と結びつき、詩的なイメージをかきたてるものになっている。しかも、地名と魔法がかかった不思議なエピソードが密接に結びついているのである。

たとえば「月見が原」。月見が原には、つるばら村のレストランがあるだけでなく、十五夜の晩にはウサギたちが集まってもちつきをし、十五夜の翌日には1年に1度だけ、タヌキたちのための会員制レストラン「レストラン十六夜」が登場する。レストランで提供される十五夜の月の光の入った料理は、タヌキたちの化ける力を強めてくれるのだという。

また、「つめくさ平」には四つ葉のクローバーだけが生え、つめくさ平にすむウサギたちは、四つ葉のクローバーの繊維をつかって蚊帳をつくっている。その蚊帳をつかった人のもとには、蛍たちが現れて心を癒してくれるだけでなく、蚊帳の中に高原のさわやかな風が吹き、寝苦しい夜もぐっすり眠ることができるのである。「たんぼぼ平」のタンポポの茎でつくられた遠眼鏡をつかうと、遙かなたの星雲や、星座の中に暮らすウサギたちの様子までをみることができるのである。

### (3) 閉じられた空間と孤立性

こうした魔法がかかった不思議な世界を成立させている要因として、詩的イメージを想起させる地名に加え、つるばら村の孤立性があるのではないだろうか。山々に囲まれ、蔓薔薇におおわれたつるばら村自体が、閉ざされた空間であることを強く意識させるのと同時に、つるばら村の住人たちも、孤立した存在として語られる。くるみさんのパン屋にしても、ほかのお店やさんにしても、つるばら村においては、たった一つしか存在しない。昔話の語りの形式にもみられるが、孤立した存在として語られることによって、その輪郭がより明確になる。閉ざされたつるばら村の〈自然〉のなかにあって際立った存在として描き出されるのである。

「三日月屋」は、つるばら村でただひとつのパン屋さんです。 (『パン屋さん』 P. 6)

つるばら村でいちばん高い山は、笛吹き山といえます。山は、ふもとまで、ブナの森におおわれています。(中略) 村井ナオシさんという若い養蜂家が、この山のふもとに、ひとりですんでいます。 (『はちみつ屋さん』 p. 6)

つるばら村に、月見が原という高原があります。そこにあるシラカバの林に、古い山小屋があります。車の通る山道から、少し林のおくにはいったところにあるので、たいていの人が、気づかず通りすぎてしまいます。(『レストラン』 p. 6)

養蜂家のナオシさんは、ブナの森におおわれた、つるばら村で一番高い笛吹き山のふもとに、たった一人で住んでいる。また、つるばらむらのレストランは、人通りの多い駅前などではなく、月見が原の白樺林の少し奥まった場所にあり、しかも「たいていの人が、気づかず通りすぎて」しまうような、気づきにくい場所に存在している。

このように、つるばら村は、山や森、林や花々に

囲まれた秘密の花園のような閉じられた空間であり、そのなかにあって孤立的に語られる登場人物たちは、レンズの焦点が一点に絞られるかのように、鮮明な像を結ぶ。しかも、閉じられた空間だからこそ、村内の人々は誰もが顔見知りで、人と人との繋がりを大切にする親密なコミュニティが存在している。

昔話研究者であるマックス・リュティ (1969) は、昔話の語りの様式の一つとして「孤立性と普遍的結合の可能性」をあげている。リュティは次のようにいう。

目に見える孤立性、目に見えない普遍的結合の可能性、これが昔話形式の根本的標識とみなされてよいだろう。孤立した図形が、目に見えないものにひかれて、くみあわさって調和的アンサンプルをなしている。<sup>8</sup>

昔話においては、登場人物やモノ、エピソードは孤立的に語られる。たとえば森の中に存在するのはたった一軒の家であり、3人兄弟が旅をするにしても、3人いっしょに出かけることはなく、必ずそれぞれひとりりでかけていく。孤立しているからこそ、不思議な力をもったこびとや魔女、やまんばなど彼岸の存在と出会い、物語が展開していく。すなわち「孤立しているからこそ、なんとでもたがいに結びつくことができる、そうやって全体としてひとつのファンタジー世界を作っている」<sup>9</sup>というのである。

つるばら村が閉ざされた空間であり、また登場人物たちが孤立した存在だからこそ、自然の中にひっそりと息づく非現実的な存在とも、結びつくことを可能にしているのではないだろうか。

物語世界における「場所」の重要性について、本田和子 (1998) は、宮沢賢治の「やまなし」や「水仙月の四日」などを例に挙げて次のように述べている。

誰が主人公であり、何がテーマなのか、一向に判然とはしないものの、その情景は清新な

出来事として消えることのない映像を臉の裏に焼き付けてしまう。(中略) 作品にとっても、読む人にとっても、「場所」がアイデンティティであり得る、特に子どもたちの場合には…。とすれば、逆に、仮初ならぬ「場所の記憶」が、確かな物語を結晶化させる場合もある。<sup>10</sup>

このつるばら村という、美しさと神秘さに満ちた閉ざされた場所が、非常に強い印象を残し、「物語を結晶化」させるうえでも、作品になくはならない役割を果たしているといえる。

### 3. 開かれた場所としてのお店やさん

さて、つるばら村というトポスについてみてきたが、そのつるばら村という閉じられた美しい空間の中心に存在するのが、お店やさんである。それぞれの作品タイトルに掲げられているお店やさんが、どのような役割を果たし、作品世界に何をもちたしているのかについてみていく。

#### (1) 人が集まる場所としての店舗

一般的に店とは、商品やサービスを提供し、商業活動を営む場である。人が生活するために必要な物を売り買いする現実的な場であり、なによりも人が集まる場所である。それは、つるばら村においても変わらない。

くるみさんが町のパン屋をやめ、おばあさんの家だった農家に越してきて、宅配専門のパン屋をはじめたのは2月も終わりのこと。最初の1週間はたくさんの注文があったもののひと月たった頃にはまったく注文がはいらず、村にパン屋ができたこと自体忘れられているようだ。そんななか、くるみさんはついこんな言葉をいう。「だれでもいいから、パンの注文にきてほしいな」(『パン屋さん』p.7)。

その夜のこと、台所のドアがノックされたかと思うと、タンポポの蜂蜜の入った壺と、蓄音機とともに、はちみつパンの注文の手紙が戸口におかれている。タンポポの蜂蜜を入れ、パン生地をつくる時にも

焼くときにもレコードを聞かせながらつくってほしいというのである。不思議に思いながらも、久しぶりの注文にうきうきしながらパンを焼くくるみさん。翌日、はちみつパンをとりきたのは、若いクマだった。驚くくるみさんにクマは次のようにいうのである。

「きのう、あなた、いったたでしょ。だれでもいいから、パンの注文にきてほしいなって。風が、あなたの声を、ほくのところまではこんできたんです。」 (『パン屋さん』p.16)

「だれでもいいから、パンの注文にきてほしい」というくるみさんの言葉が示すように、店はお客さんがいてこそ、初めて成立する。すなわち、店は誰に対しても開かれており、だからこそ、誰もがやってこられる場として機能しているのである。

それはくるみさんのパン屋に限らない。山野このはさんは、一人で「つるばら理容店」という小さな店を営んでいる。夜9時、店の戸をノックする音に気づき、のぞいてみると、そこには「りっぱな角をはやした、まっ白なヤギが一頭」(『理容師さん』p.7)立っていたのである。ヤギは産毛をすいてほしいという。世界一周の旅行中だったヤギが「空の上から、ぐうぜん、こちらのサインポールが見えましてね。」(同p.12)と、理容店を示す赤と青のサインポールをみかけて、このはさんの店にやってきたのである。

卓朗さんの営む山小屋のレストランは、月見が高原の車道から外れた白樺林の奥にたっている。気候の良い時期にはにぎわっていたレストランだったが、1月も終わりにもなると、雪にすっぽりとおおわれ一面銀世界になってしまう。卓朗さんの店には、もうひと月以上、誰もお客さんがこない。

考えてみたら、コックになってから、こんなに長いあいだ、お客さんのために、料理をつくらないというのは、はじめてのことです。

はじめてといえば、こんなに、だれにもあわないのも、はじめてです。

ある朝、卓朗さんは、店のまえに立って、外の白い景色をながめながら、つい、こんなことをつぶやきました。

「タヌキでもキツネでもいいから、きてくれないかなあ。」 (『レストラン』 p.100)

卓朗さんの切実な言葉に呼応するように、その日の午後、やってきたのはかんじきをつけた若い父親。明日、娘とランチに来たいこと、そしてもうすぐ小学生になる娘の人参嫌いを克服するために人参を使った料理を作ってほしいことを告げ、卵と人参を差し出すのである。翌日、2人のために卓朗さんが用意したのは、人参のスープ、人参のパンケーキ、人参のグラッセを添えたオムレツ。女の子はおいしそうにペロリと平らげ、家でも食べたいとねだるのである。おとうさんは卓朗さんに定期的に料理を教えるもらうことになる。父娘は人の姿をしていたものの、実はタヌキ。しかも積もった雪でハンカチをつくったり、春を呼んだりする魔法も使えるタヌキだったのだ。

お店やさんは、誰に対しても開かれ、誰でもが客としてやってくることができる。しかも、前節でみたように、個々の登場人物が孤立した存在だからこそ、物言う動物たちや妖精など非現実的な存在とも容易に結びつくことができるのである。短編連作からなる「つるばら村」シリーズは、各店舗にやってくる不思議なお客さんたちと四季ごとの自然がおりなす現実と非現実が混在した、空想的・神秘的な世界を垣間見させてくれる。

では、シリーズ10作を通して、つるばら村の各お店にやってくるのは、どんなお客さんたちだろうか。分類していくと、最も多いのは動物で50話であった。うちキツネがやってくるのは10話、ウサギ8話、タヌキ、クマと続く。ついで精霊や妖怪たちが38話である。木や風など自然の精霊が最も多く、天狗、わし座などの星、座敷わらし、サンタクロースと続く。(表2参照)そして、人間のお客さんは4話のみであった。

表2 お店にやってくるお客さん

|   | 動物 (50話)                 | 回数 |
|---|--------------------------|----|
| 1 | キツネ                      | 10 |
| 2 | ウサギ                      | 8  |
| 3 | タヌキ                      | 7  |
| 4 | クマ                       | 5  |
| 5 | イノシシ、カモシカ                | 各3 |
| 6 | カエル、カッパ、モグラ、ネコ           | 各2 |
| 7 | ガン、ネズミ、オオカミ、ヤギ、ウグイス、トナカイ | 各1 |

|   | 精霊や妖怪等 (38話)         | 回数 |
|---|----------------------|----|
| 1 | 自然の精 (木々、花、風、雪、春)    | 20 |
| 2 | 天狗、星座                | 各3 |
| 3 | 座敷わらし、サンタクロース、やまんば   | 各2 |
| 4 | 大男、魔術師、バックス、木馬、冬將軍、雷 | 各1 |

## (2) コミュニティの交流の場としての店

さらに特徴的なのが、こうしたつるばら村の店にやってくる動物や妖精たちも、店を営んでいたたり、仕事を持っていたり、あるいは手に職をつけるための修行中であったりすることである。

たとえば、ホテル業に従事しているウサギ (『パン屋さん』『魔法のパン』) や、四つ葉のクローバーだけを詰めた枕を販売しているクローバー商会のウサギ (『家具屋さん』)、カフェ「たんぽぽ畑」を開いているウサギ (『はちみつやさん』) もいる。マジシャンのキツネ (『レストラン』) や園芸店を営むキツネ (『魔法のパン』)、焼きたてパンの店を街で開いているタヌキのありすさん (『魔法のパン』) に、同じく街で「くまのはちみつ専門店」を営んでいる隈野さんはクマだ。

ユリノキの精はネズミたちがお祭りで着る木の葉の半纏をつくる半纏屋である。この半纏を縫うために必要なミシンの糸を、つるばら村の洋服屋さんに注文して届けてもらったりもする (『洋服屋さん』)。ヤドリギの精は冬眠中の木々の幸せな夢を集めて寝具店におさめるのが仕事だが、夢が間違っ髪にからまってしまったために、このはさんの理容店にやってきて夢を傷つけないように髪を切ってもらうので

ある（『理容師さん』）。つまり動物や妖精たちにも彼らの生活を成立させているコミュニティが存在し、つるばら村のコミュニティと、お店やさんを仲立ちとして自然な形で交流しているのだ。

それは、ユリノキの精やドリギの精だけではない。ある日、くるみさんのパン屋さんに、月見が原のホテル・フローラから「朝食用の三日月パンを、三十個とどけてください。」（『パン屋さん』 p.42）という注文が入る。ホテルのオープンが故障してパンを焼けなくなってしまったのだという。くるみさんの三日月屋に注文をした理由は、小鳥たちのうわさを耳にしていたからだ。「小鳥たちは、『三日月屋』のパンは、ものすごくおいしくて、うわさしてたんです」（『パン屋さん』 p.50）。風がくるみさんの独り言をクマのもとへ運んだように、くるみさんが庭にまいたパンのかけらを食べた小鳥たちが三日月屋のパンがおいしいことをうわさする。つるばら村に存在する風や小鳥、動物たちなど、あらゆるものが店を仲立ちとして交流をしているのである。ホテル・フローラの茶色いウサギはいう。「うちのお客さんに、おたくのお店を、せいぜい宣伝させていただきます。」（『パン屋さん』 p.53）と。

それはつるばら村の村内だけではない。ふだんは蜂蜜専門店のオーナーとして街で生活している隈野さん（クマ）は、「つるばら村だより」を年に4回発行して、ふるさとの情報を発信している。街で生活しているタヌキのアリスさんは言う。

「三日月屋さんのことは、ときどき、『つるばら村だより』にでています。わたし、それを見るの、楽しみにしているんですよ。」（中略）「ふるさとのことがいろいろのっている新聞です。うちの近所に、『くまのはちみつ専門店』という、はちみつ屋さんがあるんですけど、そこのご主人が、年に四回発行して、お店にやってきたお客さんにあげています。」（『魔法のパン』 pp.17-18）

ホテル・フローラのウサギも、蜂蜜専門店の隈野

さんも、誰にでも開かれた場所としての店を営んでいるからこそ、そこに集う人や動物、妖精たちにも、交流の輪は広がっていく。そこではコミュニティ間の交流がごく自然な形で行われているのである。

### (3) 「交換」ではなく「贈与」

しかし、こうしたつるばら村におけるお店やさんは私たちの生活している資本主義社会のそれとはかなり異なる。つるばら村のお店やさんでは、多くの作品で商品の対価としての代金が支払われないのである。

「あのう、じつは、パン代、持ってないので…。」（『パン屋さん』 p.20）。くるみさんが、クマに注文を受けて焼いたパンの代金の代わりに受け取ったのは、春の音を収録したレコードだった。しかし、それを補ってあまりある恵みがもたらされる。クマのために焼いたはちみつパンのいいにおいにつられ、翌朝、村の人たちから次々とパンの注文がはいつてきたのである。くるみさんはこう思う。

（あのはちみつパンが、きっと、パンの好きなひとたちに、村にパン屋ができたことを思い出させてくれたんだわ。クマさんに、感謝しなくちゃ。そうだ!）

くるみさんは、仕事にかかるまえに自分の部屋にとんでいくと、クマからもらったレコードと、小さなステレオを持って、もどってきました。

（これからは、パンをこねるときも、ねかせるときも、やくときもこのレコードをかけよう。きっと、まえより、パンがおいしくなるはずだわ）

（『パン屋さん』 p.24）

しかも、のどかな草笛のメロディーに小鳥の声や、水が湧き立つ音まで聞こえてくるレコードをかけながらパンを焼くと、ふだんよりも、香ばしく、春の陽射しのようにやさしいパンが出来上がるのだ。くるみさんの仕事場の台所からは一日中、春の音のレコードが流れるのである。

ここからもわかるように、商品の対価としての代金の代わりに受け取るのは、モノであったり、新しい商品のアイデアであったり、珍しいものを見せてもらって幸せな思いをもらったりと、さまざまではあるが、代金以上の豊かさや喜びを得ているのが特徴である。つまり、つるばら村のお店やさんにおいては、モノとお金の「交換」ではなく、中澤新一（2003）のいう「贈与」が行われていると言える。

中澤新一は、「交換」と「贈与」の特徴について、それぞれ次のようにまとめている。以下に抜粋して引用する。

#### 「交換」

- ・商品はモノである。つまり、そこにはそれをつくった人や前に所有していた人の人格や感情などは、含まれていないのが原則である。
- ・ほぼ同じ価値をもつとみなされるモノ同士が、交換される。商品の売り手は、自分が相手に手渡したモノの価値を承知していて、それを買った人から相当な価値がこちらに戻ってくることを当然のこととしている。
- ・モノの価値は確定的であろうとつとめている。その価値は計算可能なものに設定されているのでなければならない<sup>11</sup>。

#### 「贈与」

- ・贈り物はモノではない。モノを媒介にして、人と人との間を人格的ななにかが移動しているようである。
- ・相互信頼の気持ちを表現するかのように、お返しは適当な間隔をおいておこなわなければならない。
- ・モノを媒介にして、不確定で決定不能な価値が動いている。そこに交換価値の思考が入り込んでくるのを、デリケートに排除することによって、贈与ははじめて可能になる。価値をつけられないもの、あまりに独特すぎて他と比較できないものなどが、贈り物としては

最高のジャンルに属する。<sup>12</sup>

つまり、「交換」は等価交換が原則であり、商品はあくまでモノである。そこには作った人や前の所有者の人格や感情は含まれず、モノの価値は、材料費や人件費等を踏まえて決定され、常に確定したものである。一方、同じようにモノが動くにしても、「贈与」は交換とは違う原理が働いている。何よりも贈られるモノは単なるモノではなく、贈り手の人格から分離されてはおらず、モノを媒介として人格的な何かが移動する。したがって贈与は、人と人との間に感情的・人格的なつながりをつくりだす力をもっているのだというのである。

実際、つるばら村のお店やさんで見られる商品は、単なるモノでも大量生産の規格品でもない。つくった人の思いだけでなく、つるばら村の豊かな自然の力も加わった特別なものといえる。

「タンポポのはちみつを入れてやいたパンは、若葉のあまいかおりや、そよ風や、春のお日さまにおいがしますからねえ。冬眠中に目がさめたとき、そのパンをかじると、しあわせなよい気持ちになるんです。耳もとで吹雪がビュービュー鳴ってても、たのしい春の夢がみられるんです。」（『パン屋さん』 pp.19-20）

くるみさんが、クマのために焼いたタンポポのはちみつパンは、つるばら村の春を練りこんで作ったかのように、若葉の甘い香りや、そよ風、春のお日様の匂いがし、冬眠中のクマを幸せにしてくれるのである。同様に、つるばら村のレストランを営む、卓朗さんの料理をさらにおいしくしてくれているのは、白樺の林からだされる青葉アルコールである。「おいしい空気と水のある、こんなすばらしいところで、しかも、こんなすばらしい山小屋で、レストランがひらけるなんて、あなたは、世界一しあわせなコックですよ。」（『レストラン』 p.28）。卓朗さんのつくる料理もまた、単なる商品ではなく、自然の恵みによっ



てより特別なものになっている。

家具屋の美樹さんが山のトチノキをつかって丹精込めてつくったスプーンには、山の精が力を貸して、すてきな魔法をかけてくれる。美樹さんが熱心に作ったトチノキのスプーンは、手触りもやさしく、触るとほっとするようなあたたかさがあるのだが、なかなか手にとってもらえない。そんなある晩、うす緑色のマントをはおった娘が店にやってくる。娘は「トチノキのスプーンが、売れるようにしにきたんです」(『家具屋さん』 p.32) と、山に咲いたトチノキの花をかごに入れてもってきたのである。その娘は山の精であり、スプーンになったトチノキは、娘の山に生えていた木だったのだという。

トチノキの精はトチノキの花にまほうをかけてリボンにしていく。

かごの花をひとふさつまんで、てのひらにのせると、ふうっと息をかけて静かににぎり、もう片方の手でそっとひっぱりだしたのです。

すると、どうでしょう。白い花は、ひっぱりだされたほうから、白いリボンにかわったではありませんか。「これを、スプーンの柄にむすんでください。」(中略) 白いリボンがかかっただけで、スプーンが、とてもかわいらしくすてきに見えます。(『家具屋さん』 pp.34-35)

何かお礼をとという美樹さんに対して、山の精は「お礼なんていりません。そのかわり、これからも、木をたいせつに、つかってください」(『家具屋さん』p.36) と微笑むのである。

翌日以降、トチノキの花の白いリボンを結んだスプーンは次々に人の手にとられていく。年取った病気の母親のためにスプーンを買い求めた奥さんもそのひとりだ。美樹さんは、おばあちゃんに喜んでもらえるようにと、心を込め、祈りを込めてスプーンを包む。別の日、買い物に出かけてあの奥さんに出会った美樹さんが先日のお礼をいうと、逆に奥さんから、次のように感謝されるのである。

「こちらこそ。あのスプーン、つかいやすいし、口あたりが、とてもいいって、母がよろこんでいるんですよ。あのリボンも、ほんのりよいかおりがするので、母のまくらもとにおいてます。あの花のかおりをかいで寝ると、ぐあいのわるいのがなおるような気がするっていうんですよ。」(『家具屋さん』 pp.37-38)

美樹さんの思いと山の精の思いがこめられたスプーンは、単なるモノではない。「人格や感情」が含まれたうえに、山の精の魔法という価値をつけることができないものまでもが付与されている。そこには「贈与」的な要素が色濃く出ているのがわかる。

美樹さんは、つるばら村にお嫁にきたことの喜びとともに、「山の精さん、ありがとう」と感謝を伝える。ここには、単なるモノの売り買いではなく、他者の幸せや喜びを願う心やモノに対する慈しみ、モノに込められた思いが感謝の循環ともいべき大きな輪になって広がっているのがわかる。

#### 4. おわりに

以上、つるばら村というトポスと、つるばら村におけるお店やさんの果たす役割についてみてきた。

豊かな美しい自然のなかの閉ざされた空間であるつるばら村と、生活していくうえで不可欠であり、だからこそ誰に対しても開かれた場であるお店やさんが、交錯することによって、人や物言う動物、精霊や妖精たちが集い、交流し合う魔法的な世界を成立させているといえる。ふたつの「場」によって閉鎖性と開放性、非現実性と現実性が溶け合った世界をつくりだしているのである。

実際、茂市は恩師である那須辰造に「童話には大きく分けて生活童話とファンタジーの2つがあり、よいファンタジーほど現実性に根ざしている」のだと、いわれていたという。だからこそ、パン屋さんにしても、家具屋さんにしても、はちみつ屋さんにしても、かなり綿密な取材を積み重ね、資料を読み込んだ

上で、「現実のなかから物語を立ち上げて紡ぎ出していく、という方法をとって」いるのだと述べている<sup>13</sup>。

つるばら村におけるお店やさんは、人や動物、妖精などだれもが集い、つながることができる場であった。また、そこで行われるやり取りは、単にモノを売ってその対価を得るような無機質な「等価交換」ではなく、「贈与」の要素が強い。美樹さんが精魂込めてスプーンを作り、おばあちゃんに喜んでもらえるようにと祈るように、また、くるみさんが「わたしのパンを食べたひとが、元気になったり、やさしくなったりするパンをやかなくっちゃ。」(『パン屋さん』p.56)とパンを食べた人を幸せにしたいと願うように、他者に対する想いや感情、さらには、つるばら村の自然の力や魔法がこめられた特別なものである。

同様に、動物や妖精たちも店を営み、職業をもち、そこにも他者の喜びや幸せを願うコミュニティが存在している。その二つのコミュニティが、やはりつるばら村の店を仲立ちとして交流しているのである。つるばら村のお店やさんは、店という場、商品という贈り物を介在して、あらゆるものをつないでいく。つるばら村を包むように、やさしさや感謝の循環ともいべき大きな輪をつくりだしているともいえる。つるばら村というファンタジー世界があたたかく、美しく、やさしいのも、ここに要因があるといえる。

同じように店を中心にした人気作品に、廣島玲子の『不思議駄菓子屋 銭天堂』(偕成社、2013)がある。これもシリーズ化され、アニメ化もされている。しかし、店が舞台となつてはいるものの、銭天堂は簡単にいくことができない。幸運な人のみがたどりつくことができる店であり、たどり着いた人が今一番必要としているものが商品となる。「つるばら村」シリーズとは、お店や商品のあり方、ファンタジーの構造が全く異なっているのである。

今後は、茂市の他の作品におけるお店やさんの役割についても分析・検討していくとともに、別の作者の作品も視野に入れて、比較検討していきたいと

考える。

## 引用文献

- 1 絵本ナビ (<https://www.ehonnavi.net>) レビューより 閲覧日2021. 9.23、11.14、2022. 9.11、11.26
- 2 『ゆうすげ村の小さな旅館』(講談社、2000)が東京書籍の小学校3年生用の国語教科書に掲載されていることもあり、以下のような論文がみられる。岡本恵太(2019)「小学校国語科における「わざ言語」を活用した思考力の育成－授業の談話分析からのアプローチ」『奈良学園大学紀要』、白瀬浩二(2006)「思いやりの心を贈り合う－〈教材研究〉茂市久美子『ゆうすげ村の小さな旅館』(小学三年生)－」『九州女子大学紀要』など。
- 3 茂市久美子(2012)「あとがき」『つるばら村の魔法のパン』p.154
- 4 ひろすけ童話賞は、1989年、浜田広介の功績と児童文学のさらなる発展をねがって設立された。過去1年間に出版された幼年童話と絵本を対象に愛と善意にみちたひろすけ童話の文学精神を継承し、新たな世界を創造した、優れた作品に贈られている。
- 5 西沢正太郎ほか(1992)「第三回ひろすけ童話賞発表」『児童文芸』第38巻第12号、日本児童文芸家協会 pp. 7- 8
- 6 茂市久美子・黒須和清(2005)「ウオッチング2005本を通して広がる世界～想像力のはばたき～」全国『月刊福祉』6、社会福祉協議会 p.69
- 7 茂市久美子・黒須和清(2005)前掲書 p.69
- 8 マックス・リュティ(1969)小澤俊夫訳『ヨーロッパの昔話』岩崎美術社、p.93
- 9 小澤俊夫(1999)『昔話の語法』福音館書店 p.254
- 10 本田和子(1998)「児童文学におけるトポス」『現代児童文学の可能性』東京書籍 p.178
- 11 中沢新一(2003)『愛と経済のロゴス』講談社 pp.35-36
- 12 中沢新一(2003)前掲書 pp.38-39
- 13 茂市久美子・黒須和清(2005)前掲書 p.70

(ささき ゆみこ)

【受理日 2022年12月7日】

## 茂市久美子児童書作品一覧

|    | タイトル              | 出版年     | 出版社    |
|----|-------------------|---------|--------|
| 1  | ようこそタンポポしょくどうへ    | 1989.9  | あかね書房  |
| 2  | 風の生まれるかなたに        | 1991.3  | くもん出版  |
| 3  | まほうのハカリ           | 1991.4  | 佼成出版社  |
| 4  | おちばおちばとんでいけ       | 1991.8  | 国土社    |
| 5  | キツネのかがみをのぞいてごらん   | 1991.10 | あかね書房  |
| 6  | まほうのはっぱでおくりもの     | 1992.9  | あかね書房  |
| 7  | おいしいおまじない         | 1993.3  | 教育画劇   |
| 8  | ぼくのともだちいばりんぼ      | 1993.4  | 国土社    |
| 9  | うさぎのごちそうめしあがれ     | 1994.4  | あかね書房  |
| 10 | ゆめをにるなべ           | 1994.9  | 教育画劇   |
| 11 | ひだまり村のあなぐまモンタン    | 1994.12 | 学習研究社  |
| 12 | ひみつのやどのおきゃくさま     | 1995.6  | 教育画劇   |
| 13 | 空とぶでまえおとどけします     | 1995.9  | あかね書房  |
| 14 | にこりん村のふしぎな郵便      | 1996.6  | ポプラ社   |
| 15 | かたくりのワンピース        | 1996.7  | 小峰書店   |
| 16 | 風の誘い              | 1996.9  | 講談社    |
| 17 | たいこのひびきは森のうた      | 1996.10 | 教育画劇   |
| 18 | 森のせんたくやさんあなぐまモンタン | 1996.11 | 学習研究社  |
| 19 | クマのたんす            | 1997.10 | 教育画劇   |
| 20 | つるばら村のパン屋さん       | 1998.2  | 講談社    |
| 21 | こもれば村のあんぺい先生      | 1998.6  | あかね書房  |
| 22 | ネコが手をかすレストラン      | 1998.7  | 大日本図書  |
| 23 | トチノキ村の雑貨屋さん       | 1998.10 | あすなろ書房 |
| 24 | ふたりはいつもともだち       | 1999.4  | 金の星社   |
| 25 | 風の子のミトンとあなぐまモンタン  | 1999.9  | 学習研究社  |
| 26 | お月さまにとんでいったデブール   | 1999.10 | 大日本図書  |
| 27 | ほうきにのれない魔女        | 1999.12 | ポプラ社   |
| 28 | はまゆり写真機店          | 2000.6  | 教育画劇   |
| 29 | ゆうすげ村の小さな旅館       | 2000.7  | 講談社    |
| 30 | つるばら村の三日月やさん      | 2001.5  | 講談社    |
| 31 | アンソニーはまなす写真館の物語   | 2001.9  | あかね書房  |
| 32 | ドラゴンにごようじん        | 2001.11 | 国土社    |
| 33 | まじよのめざまし          | 2002.5  | ポプラ社   |
| 34 | 雨のじょうろとあなぐまモンタン   | 2002.6  | 学習研究社  |
| 35 | とおい星からのおきゃくさま     | 2002.11 | 岩崎書店   |
| 36 | このはのおかね、つかえます     | 2003.5  | 佼成出版社  |

|    | タイトル                | 出版年     | 出版社        |
|----|---------------------|---------|------------|
| 37 | つるばら村のくるみさん         | 2003.5  | 講談社        |
| 38 | うさぎのセーター            | 2003.10 | あかね書房      |
| 39 | ドラゴンはいくしんぼう         | 2003.10 | 国土社        |
| 40 | つるばら村の家具屋さん         | 2004.4  | 講談社        |
| 41 | またたびトラベル            | 2005.1  | 学習研究社      |
| 42 | つるばら村のはちみつ屋さん       | 2005.3  | 講談社        |
| 43 | ドラゴンは王子さま           | 2006.1  | 国土社        |
| 44 | 最高のおくりもの            | 2006.4  | 全国学校図書館協議会 |
| 45 | クロリスの庭              | 2006.6  | ポプラ社       |
| 46 | つるばら村の理容師さん         | 2007.3  | 講談社        |
| 47 | アップルパイたべてげんきになあれ    | 2007.9  | 国土社        |
| 48 | ネコのジュピター            | 2007.11 | 学習研究社      |
| 49 | すてきなおへやをしょうかいします    | 2008.3  | 佼成出版社      |
| 50 | つるばら村の洋服屋さん         | 2008.7  | 講談社        |
| 51 | おいなり山のひみつ           | 2008.10 | 講談社        |
| 52 | ドラゴンはヒーロー           | 2008.12 | 国土社        |
| 53 | 招福堂のまねきねこまたたびトラベル物語 | 2009.6  | 学習研究社      |
| 54 | つるばら村の大工さん          | 2009.9  | 講談社        |
| 55 | ドラゴンはキャプテン          | 2010.11 | 国土社        |
| 56 | つるばら村のレストラン         | 2010.12 | 講談社        |
| 57 | おひさまやのおへんじシール       | 2012.4  | 講談社        |
| 58 | おひさまやのたんぽぽスプレー      | 2012.7  | 講談社        |
| 59 | おひさまやのテーブルクロス       | 2012.10 | 講談社        |
| 60 | つるばら村の魔法のパン         | 2012.11 | 講談社        |
| 61 | おひさまやのめざましどけい       | 2013.11 | 講談社        |
| 62 | ドラゴンはスーパーマン         | 2014.8  | 国土社        |
| 63 | 魔女バジルと魔法のつえ         | 2014.12 | 講談社        |
| 64 | ドラゴン王さまになる          | 2015.2  | 国土社        |
| 65 | 魔女バジルとなぞのほうき星       | 2015.7  | 講談社        |
| 66 | 魔女バジルと黒い魔法          | 2016.5  | 講談社        |
| 67 | アンティーク・シオンの小さなきせき   | 2016.6  | 学研プラス      |
| 68 | 魔女バジルと闇の魔女          | 2017.9  | 講談社        |
| 69 | 魔女バジルと魔法の剣          | 2018.3  | 講談社        |
| 70 | 麒麟の山のぼり どうぶつのかぞく麒麟  | 2019.2  | 講談社        |
| 71 | 魔法のたいこと金の針          | 2019.12 | あかね書房      |
| 72 | ごちそうたべにきてください       | 2021.1  | 講談社        |

番号が塗りつぶされた作品がお店やさんを舞台とした作品である。